

## (研究ノート)

# 英語教育研究のためのフォーカスグループインタビュー —学修者の声より課題を分析する—

## Focus Group Interviews for English Education Research

北村 優子\*

Yuko KITAMURA

### 1. はじめに

#### (1) 研究背景

2016年8月に「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて」、文部科学省から報告資料が公開された。この資料では、小・中・高等学校での「グローバル化に対応した英語教育改革実施スケジュール」に加え、「大学や海外、社会で英語力などを伸ばす基盤を確実に育成」とある。具体的には「成熟社会にふさわしい我が国の価値観を海外へ展開し、厳しい交渉を勝ち抜く人材の育成」が挙げられている。ここで注目すべき点は、小・中・高等学校から大学へ英語力を伸ばす基盤をつなぐことが明記されていることである。

英語教育方針の流れを鳥飼 (2012:10-11) は次のように整理し述べている。「話せないような英語では困る。使えるようにして欲しい」との声が経済界からあがったのは、高度経済成長期に入る1960年代後半であった。1989年には学習指導要領が改訂され、ここで初めて「英語を学ぶのはコミュニケーションのためである」と明記され、「コミュニケーション」という言葉が使われた。2002年には『「英語が使える日本人」の育成のための戦略構想」を掲げ、文部科学省は5ヵ年計画を打ち出し、翌2003年度には『「英語が使える日本人」の育成のための行動計画」を実施した。例えば小学校への英語導入、センター試験へのリスニングテスト導入、スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールはこの5ヵ年計画に

含まれていたものだ。2008年には学習指導要領が改訂されたが、2003年度からの5ヵ年行動計画が終了し、「コミュニケーションで使える英語」が一般に認知されたころだとも言える。小学校での外国語活動必修化が話題となった時期でもある。2013年度からは高校では「英語の授業は基本的に英語で行う」と明記され議論を呼んだ。

小学校に対しては「素地を養う」、中学校では「基礎を養う」、高校になると「コミュニケーション能力を養う」という表現が使われ、英語学習を通して「コミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くこと、話すこと、読むこと、書くことのコミュニケーション能力を養う」という同じような表現が使われていることを鳥飼 (2012:11) は指摘している。「コミュニケーション能力を養うことが日本の教育の大きな目的になっている」といえる(鳥飼, 2012:11)。また、グローバル人材の育成は大学での外国語教育で求められていることの一つとして挙げられることもできる。

#### (2) 研究目的

多くの大学生が大学入学時点で、すでに外国語として英語を一定期間学習した経験をもっている。また、現在大学に在籍している学生は小学生の頃に外国語活動が必修化され、その経験もあることが推測できる。彼らの英語学習経験を大学入学以前に遡り聞くことにより、彼らの英語教育(経験)に対する

\*企業情報学部助教

イメージや意味・解釈を理解するよう努めることとした。英語教育について当事者の声から読み解くことを試みることにより、英語教育の今後の課題を学生の視点から理解することが可能となる。本研究では予備調査として、フォーカスグループインタビューを実施し質的データ分析<sup>1)</sup>を行う。

### (3) 研究手法

まず、予備研究として2つの大学でフォーカスグループインタビュー(FGI)<sup>2)</sup>を行った。大学は首都圏にキャンパスを持ちスーパーグローバル大学創生支援(グローバル化牽引型)に採択されている。大学Bは地方都市にキャンパスがある。今回のFGIに参加した学生はそれぞれの大学で福祉系学部(に在籍している。大学Aでは英語が必須科目(選択科目としての英語もある)であり、全員が大学入学後に英語を履修しなければならない。一方、大学Bでは外国語科目が必須になっているが、英語以外の外国語を履修する選択肢がある。今回のFGI参加者は全員が英語履修者であった。

まず、2016年11月に大学Bにて最初のFGIを実施した。5名の学生が参加し、そこにファシリテーターとして、非英語ネイティブの英語教員1名(日本人、女性)と英語ネイティブの英語教員1名(ニュージーランド人、男性)が加わり、1時間45分のFGIとなった。

大学Aにおいても2016年12月に8名の学生(1名途中退席)とB大学での実施時と同じ非英語ネイティブの英語教員1名と英語ネイティブの英語教員1名がファシリテーターとして入り、1時間半程FGIを行った。

FGIを実施する前には参加者に対して、今回の研究目的や研究倫理<sup>3)</sup>に則り行われるものであることが説明され、参加者全員から研究参加の同意を得た。参加学生の決め方(募集)は、ファシリテーターがまず、FGIに興味を持っている学生に声を掛け、その学生が自分の友人に声を掛けていくというスノーボールサンプリングを用いた。これは、FGIへの参加に好意的である学生を中心に活発な議論を行ってもらうことを前提とする必要があることから本研究には最も適したサンプリング方法だと言える。

## 2. インタビュートランスクリプト

まず、大学Aと大学Bで実施したFGIの音声データ

を全て文字起こし、分析の第一ステージとしてオープンコーディングを行った。これは、文字データをキーワードやコードごとに整理することを指す。そして、オープンコーディングや焦点コーディングをさらに発展させ、より大きなかたまりであるパターンやカテゴリーを生成していく。これらを繰り返し比較(継続的比較法)することによって、共通性のあるデータをグループ化(コード)しコンセプトを創出(暫定的な名前)し、カテゴリー化することが可能になる(Glaser, 1978, Merriam, 1998, 佐藤, 2008参照)。

予備的ではあるが、文字データを「英語履修動機」、「授業環境(教員(NEST/NNEST)<sup>4)</sup>、理想、過去の経験、不安)」というコードごとにまとめたインタビュートランスクリプトの一部を下記に記載する。

●「英語履修動機(単位取得のため、将来のため/使うことを想定して(必要性)、危機感)」

Facilitator<sup>5)</sup>: …そもそも皆、外国語って英語じゃなくても履修可能じゃん。選択必修の2教科分の単位って。じゃあ、みんなどうして英語にしたの?

Student III: [笑い]ちょっと参考にならない。

Facilitator: 参考にならない?!

Students: [笑い]

Student III: 英語で、えっと、選択肢の中で英語はやってたから(今まで)、英語が一番下のところからやれば単位はもらえるかなって思って[笑い]

Students(複数): [笑い]

Facilitator: じゃ、単位が欲しかった?!

Student II: そういう人多いよね。

Student III: 第一希望が英語で、第二希望は韓国語にしました。で、第一希望が通っちゃった[笑い]

Student IV: やっぱり共通語で使えるのは英語かなって思って。あと、将来考えたときに、(施設)利用者の人が英語を話す外国の方で、なんかその、英語を使う場面が出てくるって考えたなら、なんか、ぞつとしちゃって、なんか英語苦手だから克服しようかなって。で、大学で英語をやるうかなって。身につけながら単位を取る。

Student I: 私は、今まで、英語と日本語を一応勉強してきて、これ以上、言語が増えたら頭がパンクするって思って[students: 笑い]、これ以上他の言語は覚えられないって思って、もう英語にしました。

Student V: なんとなく。中国とかドイツとか興味

なかったから英語でいいかって。

**Facilitator:** 消去法？

**Student V:** 選択しなくていいなら、どれも(外国語は)やりたくないけど、選ばなきゃいけないから、じゃ、英語でって。

**Student II:** 私は、高校の時は英語が得意だったから、だから、なんか、高校の時、クラスで、学年で英語は[上位]だったから、必然的っていうか…。友達に外国人が多くて、なんか、いつも「〇〇の英語下手」って言われるから、「日本人ばい」って言われるから、将来もっと喋れるようになりたいって思う。

(2016/11/23, 12-13)

**Facilitator:** 大学で英語を履修した理由はなんですか？

**Student A:** そうですね。外国の方で訪日している方は意識がこうやって高いので、何かディスカッションしたりするのに英語が必要で、自分が好きで主体的にやっているというよりは、必要だから頑張る、頑張ろうと思って、今も英語の授業とか受けてて、自分全然できないなっていう劣等感はあるつつも何とか頑張ろうかなって。

(2016/12/6, 2)

[・・・(省略)]

**Student B:** 大学では、自分で英語に触れにいかないとだめで、部活もやっているんで留学も時間をうまく使わないといけなし、自分からいかないと他国の人も関われないし、自分のやりたいことだったら大学では自分で動かないといけなくなってる。授業は自分で選択しないと英語に何も触れられない。せっかく高校で英語・多文化に触れてきたのに、大学では自分から動かないとシャットダウンされてしまうというか…。

(2016/12/6, 5)

[・・・]

**Facilitator:** みなさんは、学科は違ったりしているようですが、学部では英語は必須になっているんですか？

**Student<sup>(6)</sup>:** 1年生の時は、ディスカッションとプレゼンテーションとライティングが必須。単位は全部1単位で計6単位(前期3単位、後期3単位)。第二外国語で4単位、合わせて10単位(履修する必要がある)。

(2016/12/6, 6)

[・・・]

**Facilitator:** 必修の3教科の時はどういう先生に教

わっていました？

**Student\*:** ライティングとディスカッションとプレゼンの先生はそれぞれ違って、日本人の先生だったり、ネイティブの先生だったり、いろいろで。クラスは入学したときのTOEICの点数で分かれてて、自分の選択でこの先生のを取りたいとかはできないのが必修です。

[・・・]

**Facilitator:** ディスカッションはほとんどネイティブ入れているんですよ。しかも少人数だから。8人くらい、1クラス。

**Student<sup>(7)</sup>:** ディスカッション、ネイティブの先生でも指示は英語で普通に受けるけど、ディスカッションの練習するのは学生同士が多かった。多かったよね？同じクラスだったんです〇〇と。…ディスカッションが日本人の先生だったからといって、そんな問題を自分は感じなかったなって思います。

**Facilitator:** じゃあ、先生は英語でディベートとかディスカッションの仕方を説明して、学生同士が実際ディスカッションをするっていう、そんな感じ？

**Student G:** そう。そんな感じ。先生と一緒に会話をするのはほとんどない。学生同士のディスカス。

**Facilitator:** それでどう思いました？ 自分のイメージしていたディスカッションの授業でした？

**Student G:** 私は普通に楽しかった。レベルも結構分かるんですけど、周りも結構喋る人が多くて、で、その中で意見を言ったりとかして、いろんな考え話したりとか、学生の中でできていたから、先生とかと話したいとかは思わなかった。

(2016/12/6, 7-8)

[・・・]

**Facilitator:** プレゼンテーションスキルの(科目)はどうでした？

**Student D:** でも、私はアメリカに行ったときにプレゼンをする機会があって、その時はやっておいて良かったなって思いました。流れとかがわかっていたので良かったなって。長さを調節しながらできたので良かったし、みんなの前で英語を話すというのもモチベーションになるのかなって思いました。

**Facilitator:** ちなみに、そのプレゼンの授業はネイティブの先生が持つのが多い？

**Student:** 前期は日本人で、後期はネイティブでした。

**Facilitator:** 日本人っぽいとか印象もつようなこ

とありました？

**Student G:** 先生がどうこうっていうよりも、自分のなかで甘えが出ちゃうなって。困ったら日本語話せばいいやって。自分の中で生まれちゃうかなって。・・・

**Facilitator:** ネイティブの先生で、日本語が分からなくて、日本語で言いたいのに言えなくて困ったっていうことありますか？

**Student:** 宿題だされても、みんな解釈が違って、結局なんだったの？ってなりました。

**Facilitator:** そういう時はどうするの？みんな解釈が違って。

**Student:** えっ、なんか多数決で、一番多い解釈の中で、そうなんだねーって[笑い]。

**Facilitator:** そういう場面だと、日本語が通じれば確認できるのっていうことですかね？

**Students:** そうですね。

(2016/12/6, 9-10)

[・・・]

**Facilitator:** みなさん、福祉系学部で、私のイメージだと、語学学習と今みなさんが専攻している分野というのが直で結びつかないのですが、でも、みなさんの話を聞いていると、熱心に英語に興味をもってやられているようなんですが、それは将来のためとか、卒業後の進路選択で具体的に考えているとか、そういうのありますか？

**Student F:** 自分は…関係で大学院とかいって、…大学院に行くのなら英語が必要だって言われて、それもありますし、英語で会話するのが、楽しいっていうか、口下手なんですけど、ま、そうですね。会話が楽しくて昔からやっています。

**Student D:** …(福祉職ではなく)一般(企業)に行く人も多くて、私の周りも実習に行って、福祉職じゃなくて一般に行きたいって言う子も増えてきてはいますけど、やっぱり私はそのまま福祉職に就きたいとは思っているんですけど、日本の福祉はやっぱり遅れているなって思うところがあるので、海外の福祉を学んでから、日本の福祉職に就きたいっていう目標があって、その福祉を学ぶツールとして英語を(やってきました)。

**Facilitator:** どうですか。[まだ答えていない学生に対して]

**Student C:** 私はまだ2年生なので、まだ考えてないというか、考えたくないというか(笑)まだ避けて

いるところがあるのですが、…公務員になれたらいいなと思っていて、そう考えたときに、今後、英語を使うのかなって思ったときに、「あれ、使わないのかな」って思うんですけど、100%なれるわけではないので、TOEICのスコアとかをもっとしても良いのかなって思います。でも、実際にTOEICのスコアが良いからと言って会話が、できるわけではないなって、最近思ってます。それは、なんでかっていうと、私、〇〇キャンパスで毎週2回TOEICの講座をとってるんですけど、けど、ま、なんだろう、600点、700点くらいだと、普通にある程度勉強すれば喋れなくてもとれちゃうんですよ。点数イコール英語が喋れるって比例はしていないのかなって、最近思いました。

**Facilitator:** 自分のなかでは、TOEICのスコアに重きを置くよりも、喋れるか喋れないかに重きを置いてやりたい？

**Student C:** はい。

**Facilitator:** どうですか。[他の学生に]

**Student D:** 私、〇〇学科なんですけど、政治とかに興味があって、で、そういう職場とかも見に行ったりして、やっぱり違うかなって。で、一般(企業)とかに行ったりするのかなって思ったりして、自分、英語とか使える職業だったら、自分も頑張ろうって思うし、学びにつながるし、学びは成長につながるし、英語使える職業いいなってのと、できたら海外の人ともコミュニケーション取ったりとかする機会は欲しいので、それが仕事になるのかプライベートになるのかは分からないんですけど、そういう面は大事にして職業、選んでいきたいなって思っています。

**Facilitator:** 結構、みなさん英語が身近でびっくりしました。英語が選択肢の一つとして学んでいったら可能性が広がるとかっていうのが、具体的に自分の専攻と関連付けたりして・・・。ツールとしての英語とか。

**Student D:** 大学だけじゃなくて、世間がグローバル化、グローバル化って言い始めて、で、そうなって大学とかにも英語が話せる子とかがいて、そういうのを目の当たりにする機会があると、「あっ、やばい」って危機感もったりして「英語やっぱできるもいいよな」って思うし、自分ももっと勉強したいって思う。…私は大阪出身で、大阪も外国人が多いですけど、東京も普通に街中に外国人いるわけじゃな

いですか、そういうのを見ると、英語が話せないだけで、なんだろうな、英語が話せることがアドバンテージになるというよりも、英語が話せないと選択肢が縮まるっていう風に捉えてしまう気がします。

(2016/12/6, 10-13)

●「授業環境（教員、理想、高校時代、不安）」

Facilitator：教科として英語をやりだしたのはみんな中学からだよね。

Students：うん。

Facilitator：英語の先生ってどんなイメージもつ？

Student I：気にしてない（笑い）

Student II：なんか物事はっきり言う。

Student III：あー、確かに。ね。

Student II：そんな感じがする。

Facilitator：その共感どころって何？何？

Student I：中学時の（英語の）先生が、生徒指導でめっちゃ怖かった

Student III：それって男？

Student I：男

Student III：それ、こわいね。

Facilitator：その先生の英語の授業はどうだった？なんか怖い感じ？

Student I：いやー、でも、なんか、おもしろかった気がする。そんな覚えてない。けど、みんな、当てられるときビクビクする感じ

Facilitator：大人しい英語の先生にまだ出会ったことない？

Student IV：ある。高校3年生の時の担任の先生が英語で、おとなしくて、で、おとなしすぎて、なんか、声が聞こえてなかったりして、男の先生で、で、…みんなで「聞こえなかったよね」って確認し合ったりして。

Student I：英語の発音悪い人とか結構いた。

Students：そうなんだ。

Student I：なんか「ピープル、ピープル（people）」って。

Students：なにそれ、へー。[笑いながら]

Facilitator：発音の悪い先生は嫌だ？

Student II：でも（発音が悪い先生だと）お手本にならないから

Student I：お手本にならないから。

Student II：英検とか発音、めっちゃ言われるし、それで先生が「ピープル、ピープル」って言ってて、

そう（英検の面接で）言っちゃったら[笑い]

Students：[笑い]

[・・・]

Facilitator：ちなみに「正しい」って思う発音ってなんだろうね？どういう発音が正しいと思います？

Student II：アナウンサーみたいな。

Student III：はきはきってこと？

Facilitator：アナウンサーみたいなのって、どのようなイメージありますか？

Students II：正しい発音とハキハキした（話し方）

Facilitator：私はニュージーランドからでしょ。で、そのニュージーランド人とかアメリカ人とかイギリス人とか、どれが正しい発音だと思いますか？

Student II：それは国によって違うんじゃないですか？

Student III：うん。

Student II：でも、日本人って抑揚がないっていうじゃないですか。ことば（日本語話す時）に、その抑揚がある人はちょっと変に感じるかも。

[・・・]

Facilitator：自分に合う発音とか考えます？

Student II：コミュニケーション（意思疎通）図るんだったら、通じる方がいい。

Facilitator：発音がきれいである方が良いけれども、結果通じれば良いと思う？

Student II：コミュニケーションを取るのであれば。ただ、教えられるのは（発音が良い方が）

Facilitator：例えば、中国人とかマレーシア人とか、日本語ができない人であれば、コミュニケーションを取るために、英語をお互い使うって結構考えられるじゃん。その時に、マレーシア人とか中国人とかの英語って、また発音が違うよね。きっと、そういう人の英語とかがって、どんな感じって思う？

Student II：イメージが…

Facilitator：会ったことある？

Students：ない。

Facilitator：それはそうか。

Facilitator：そっか。結構、違うんだよね。シンガポールも英語が公用語で使われているけれど、結構違うし、

Facilitator：インドもそうですね。

[・・・]

(2016/11/23, 3-7)

Facilitator：英語の先生で、日本人の先生とか外国

人の先生とか意識したことある？

例えば、大学に入って、英語の担当者の名前みて、日本人だ、とか外国人かなとか思った？カタカナだからネイティブの先生かな、とか思ったことある？

Student II: 私はあんまりない。

Student III: 不安かな。日本語しゃべらない先生だったら、どうやって授業とか…。

Facilitator: あー、日本語のできない先生だったら、授業のときにどうやってコミュニケーションとろうかなって思うんだ？ 逆に、日本人の先生で「ピープル」っていう発音する先生だったらどうしようかなとかは思わないの？

Student IV: 日本人の先生だと、不安はないし、英語っていうかたちは入ってくるからいいかな。

Facilitator: 「英語っていうかたち」ってなに？

Student IV: 授業としてはなりたつかなって[笑い]

Students: わかる、わかる[笑い]言いたいことはわかる

Facilitator: じゃー、よめるってことね、どんな感じですか？

Student IV: 一応、テストは大丈夫かな。

Student III: 分からなかったら、聞きやすいだろうし。

Facilitator: どう？うなずいてるけど [Student Vの方をみて]

Student V: 別に気にしない。

Students: あんまり気にしないよね？

Student I: 気にする。めっちゃ、授業中に発言をもとめてきそう。外国人の先生だと。

Facilitator: えっ、じゃあ、当てられたりするのあまり好きじゃないってこと？

Student I: あまり好きじゃないですね。

Facilitator: 当てられるのとかってどう？

Students II: 私は、当てられるというのじゃなくて、みんなが自分で言える環境の方が好き。高校の時とかも、私、一番後ろの席から、「わー」ってやってたし、だから、当てられるのは好きじゃなくはないけど、言いたい人が言えればいいと思う。

Facilitator: うん うん、そういう雰囲気があればいいと思う？

Student II: うん。

Facilitator: 逆に、黒板に書いたり、座った状態で、「はい〇〇ページ、ここやって」というのは嫌だ？

Students II: それも好き。

Students: [笑い]

Student II: それも好きだけど、もくもくとやって、なんか、たまに授業で話せるような授業、あんまり話せる英語の授業に出会ったことない。

Facilitator: へー、じゃ、いままでどんな授業だった？

Student II: 高校は、本当さっき言った、文法書いて、ひたすら写して、ここは過去分詞でとか

Student III: 座学だよな。

[・・・]

(2016/11/23, 7-8)

Facilitator: 例えば、テストなかったら皆さん嬉しい？プロジェクトとか、先生が決めちゃったり、書く試験じゃなくて、グループごとにプロジェクト、テーマについてこうやってって、先生が決めれば…。

Student II: 私は良いけど…

Student I: 私もいいと思うけど、ただ、学生によって求めるものが違うと思う。積極的に外国の方とコミュニケーションをして、将来いきたいなっていう人とかは、そういうの(プロジェクト)大歓迎だと思うんですけど、普通に日本だけでやって、TOEICとかそういうの点数とか、資格重視の人とは考えが違ってくると思う。

Student II: 資格重視の人が、さっき言ってたグループつくってプロジェクトやってっていったら、たぶんキレると思う。

Students: [笑い]

[・・・]

(2016/11/23, 12)

Facilitator: 高校で学んだ英語と大学で学んだ英語は違う？違いがあるなと思ったら教えてください。

Student A: 高校までの英語と大学での英語の違いは、こういう風にコミュニケーションを取るための英語は、あるにはあったんだけど、「日本語でもいいよ」みたいな、なんだろう…コミュニケーションを積極的に取ろうとする授業ではなかったの、勉強、座学での英語の授業が多いなと思いました。で、大学に来てみたら、より実践的で対話での英会話で違うなと思いました。

(2016/12/6, 1)

Facilitator: 英語教育を改善するべきところがあったら、教えて欲しいなって。

Student: …高校の授業だと、机に座って一人でや

る勉強が多くなって。

**Facilitator:** その文法の勉強って今、役に立ってると思わない？

**Student:** 高校だと、結構複雑な文章をやってたから、もっと会話中心の授業もあっても良いかなって。… 私は喋った方が頭に入る方なので、喋って聞いて英語を覚えるタイプだったので、やっぱ、誰かと会話が多い方が英語が、その会話できた時の達成感とか、そういうの味わえると思うので、もっとコミュニケーションを取る英語の授業が中学も高校もあった方が良いと思う。

**Facilitator:** 難易度的にはどうですか？

**Student:** 高校の方が難しかった。

**Student:** 私もそう思う。

**Facilitator:** どこが？コンテンツ？

**Student:** 自分で考えるのが大学で、高校までは知らないことを教えられる。難しい文法とかも教えられる。大学だと、実践をする。自分の知っている知識を使ってみるっていうのが大学かなって。

**Student:** 大学と高校では求められている英語が違うかなって。高校の時は、いかに正解を時間内に導きだせるかっていうので、答え方っていうのがあって、それを覚えていくっていうのが多かったように思うんですよ。けど、大学のエッセーとかディスカッションでは、正解はないんだけど、自分で高めていくというか、ブラッシュアップしていくというか、難しいって感じるというか、どちらも難しいけれども、違う難しさかなって。

(2016/12/6, 15-16)

### 3. 課題と展望

インタビュートランスクリプトを帰納的にコーディングすることにより、「英語履修動機」と「授業環境」がコード（概念的カテゴリー）として浮かびあがった。「英語履修動機」としては、「英語ができないと選択肢が狭まる」というような必要性を実感している積極的理由や「英語が通じない」、「英語が下手」だという経験から学修へ繋がっているもの、「大学を卒業するのに必要」だという現実的選択（一時的）による消極的なものもあった。「授業環境」コードでは、英語授業・教員に関する経験や理想、高校時代の英語科目（内容）と大学での英語科目を比較した意見が中心に出されている。その中には「不安」を示すものがあった。例えば、「授業環境」での不安

としては、日本語で教員とコミュニケーションが取れないことに対する不安、授業中に発言を求められることに対する不安等があった。この点については、外国語学習不安（Horwitz, Horwitz, and Cope, 1986参照）と関連づけ発展的研究を行うことが可能であろう。また、不安感を軽減する方法の一つとして第一言語を積極的に利用することも考えられる。これは、上述したように2013年度から高校で行われている「英語の授業は基本的に英語で行う」というアプローチをどの様により効果的に実践できるかという課題であるとも言えるだろう。その他の不安要因として、英語ができないことにより不利益が生じるのではないかという焦りや不安も語られていた。

インタビュートランスクリプトから分かるように、英語の必要性を実感している学生や積極的に英語力の向上を図ろうと英語科目を履修している学生は、海外体験や授業外で英語を使う経験をした場面、英語でコミュニケーションが図れず困った経験をしたことについて話してくれた。過去の「悔しい」経験や「英語ができたらいいな」という目標が英語学修動機へ繋がっている一方で、過去の経験が苦手意識を形成させたり不安感を煽ってしまう可能性も指摘できる。この点にも配慮し、授業や国内外での体験学習も含め英語を実際に使用する経験を上手く積み重ねていくことが大切なだろう。

最後に、今回FGIに参加してくれた学生が話してくれたように「グローバル化」ということばに日常的に触れる機会が多くなっている。上記にあるように、2016年8月に文部科学省から出された報告資料「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめについて」では、英語力を伸ばす基盤を小・中・高等学校から大学へつなぐことが明記され、「成熟社会にふさわしい我が国の価値観を海外へ展開し、厳しい交渉を勝ち抜く人材の育成」が挙げられている。2012年にはすでに日本政府が「グローバル人材育成戦略」を打ち出している。鳥飼(2016:49)によると、その内容は英語教育に関することが多くを占めており、『『グローバル人材』には英語力が必須であると考えられていることが明白』である。2014年には「スーパーグローバル大学」が指定されるなど、大学に求められている課題のひとつは、グローバル人材の育成であるといえる状況になった。田所(2016:120-121)は、グローバル人材の定義は様々で一つにすることは難しいとする一方で、「世界と平和

を築き多様な価値観を持つ人々とともに協働できる人材を育てること」が求められていると述べている。鳥飼(2016:51)は、「グローバル市民<sup>8)</sup>」ということばを使っている。また、グローバル市民が使う英語は英語母語話者間とのものを想定しただけではなく、「国際共通語としての英語」であり、異なる背景の人々との関係構築、つまり異文化コミュニケーションがその目的である(鳥飼, 2016:56-57)。今回のFGIから分かったように、学生が英語の授業に求めているもの(解釈)は多様であり、それを踏まえてどう対応できるのかは大きな課題である。「グローバル市民」、「国際共通語としての英語」というアプローチがそれに応える新たな研究課題であるといえるのではないだろうか。

## 注

- 1) 「本書で解説していく質的データ分析の場合は、単にコーディングによってデータの縮約をおこなうだけでなく、その一方で、何度となくオリジナルの文脈に立ち帰って、それを参照しながら行為や語りの意味を明らかにしていこうとするところにて特徴がある。」(佐藤, 2008:57)
- 2) フォーカスグループインタビュー (Focus Group Interview: FGI)  
「フォーカス・グループ法によるインタビューやディスカッションでは、あるグループの人びとを集めて特定のトピックやある範囲の問題について議論してもらう。」(T.A.シュワント, 2009:193)
- 3) 研究目的外利用を行わない、本名を使用しない、録音をすること等を事前に説明し承諾を得た。
- 4) NEST=Native English-Speaking Teacher, NNEST=Non-Native English-Speaking Teacher
- 5) Facilitatorは2名が参加していたが、本研究ノートのトランスクリプト上ではどちらの発言かの区別は明記しない。トランスクリプトの原本には分かるように記載している。
- 6) 個別の認識記号は必要なし。
- 7) studentのみで個別認識の記号/番号がない場合

は、個別認識の必要がない又は文字データからの認識が不明なケース

- 8) 「グローバル人材は、日本企業のために世界で闘う人材というイメージが濃厚ですが、グローバル市民は、闘うのではなく、地球社会に貢献するのです。人類の未来が持続可能である為には、文化が異なり言語を異にしながらも、多文化・多言語が共存していくことが必須であり、その中で自分なりの貢献ができる人が『グローバル市民』なのです。」(鳥飼, 2016:51)

## 参考文献

- 佐藤郁哉(2008)『質的データ分析法』, 新曜社
- 鳥飼玖美子(2012)「国際共通語としての英語」とは?: 多文化社会における英語使用のビジョン[講演会記録]. Departmental Bulletin Paper. 外国語教育フォーラム =Forum of Language Instructgtors, 6: 3-22.
- 鳥飼玖美子(2016)「グローバル人材からグローバル市民へ」、斎藤兆史・鳥飼玖美子・大津由紀雄・江利川春雄・野村昌司(著)『「グローバル人材育成」の英語教育を問う』、ひつじ書房
- 田所真由子(2016)「キャンパスの課外活動がファシリテーションで変わる!」中野民夫, 三田地真実(編著)『ファシリテーションで大学が変わる』ナカニシヤ出版
- T.A. シュワント(著) 伊藤勇, 徳川直人, 内田健(監訳)(2009)『質的研究用語辞典』、北大路書房
- Glaser, B. (1978) Theoretical Sensitivity. Mill Valley, CA: Sociology Press
- Horwitz, K. E., Horwitz, B. M and Cope, J. (1986) “Foreign Language Classroom Anxiety”, The Modern Language Journal, Vol.70, Iss.2, pp.125-132
- Merriam, S.B. (1998) Qualitative Research and Case Study Applications in Education. San Francisco: JOSSEY-BASS